

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520418

研究課題名(和文)戦後の少年少女向け翻訳叢書にみる「西洋」と「東洋」 教養形成の追究

研究課題名(英文)The "West" and the "East" in Collections of Juvenile World Literature in postwar Japan: Quest for the Cultural Education

研究代表者

佐藤 宗子(SATO, MOTOKO)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：40154108

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：戦後の少年少女向け翻訳叢書においては、とくに1950年代の創元社版・講談社版全集の「東洋」編の企画に、新しい「世界」の中にアジアを位置付けようとする翻訳者たちの意思がみられる。当時の熱い中国文学熱を反映し、また媒介者たる学校教師たちは隣国を知る手立てとして作品群を捉えた。20世紀後半の「東洋」への注視は、若年読者への「教養」形成を意図するものだったが、実は明治期以来の西洋的思考に基づく見方が底流にはあった。

時代が下るとともにこの状況は変化してきており、半世紀後の電子化時代の今日において、「読書」に対する関心の変化自体、社会的問題となりつつある。

研究成果の概要(英文)：The idea of the "East" volumes in the translated collections for young readers in the 1950s emerged as a recognition of a new "World" in the postwar Japan. The translators tended to show their westernized thought toward Asia. Both of Sogen-sha's series and Kodan-sha's series contained quite a number of modern Chinese works under the influence of a fever for Chinese literature among adults, nevertheless those works were treated as a clue to know the neighboring country by mediator-schoolteachers. There surely existed, in the latter 20th century, the zeal and the strong intention to attach great importance to the "East" or "Asia" through cultural education for young people, with a deep-rooted habitual way of literary thinking based on Western literature from the Meiji Era.

But with the spread of computers, reading is regarded as one of the tools of entertainment or as a way to get some information, so that children's lost interest in reading has become a social issue.

研究分野：比較文学

キーワード：比較文学 児童文学 翻訳 教養形成 叢書 少年少女

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初の学術的背景は、以下のようであった。

比較文学研究では、国内外を問わず「翻訳」は極めて重要かつ基本的なテーマである。たとえば国際比較文学学会の大会(3年ごとに開催)でも、また国内の比較文学研究でも、翻訳関連の研究発表は数多くみられる。ただし、児童文学に関わる研究発表は、きわめて少ないのが実情である。

一方、児童文学研究における翻訳・再話研究は、本格的に照明が当てられるようになったのは、本研究報告者である佐藤の『「家なき子」の旅』(1987)の刊行以後とあってよい。国際的には国際児童文学学会の大会(隔年開催)においても、一定の割合で翻訳関係の研究発表がなされ、関心は高い。

また、「教養」形成に関しては、2010年度の日本比較文学学会全国大会のシンポジウムテーマに「教養 概念の形成と展開」が取り上げられるなど、最近、関心が出てきているものの一つと捉えることができる。

ただし、比較文学でも児童文学でも、いわゆる文学全集などの「叢書」に注目した研究はまず見られず、さらに翻訳・再話の受容と「教養」形成の関係に着目、研究に着手したのは、佐藤が初めてとあってよい。

とくに2008年度から2010年度までの間、科学研究費助成金基盤研究(C)を受けて、「少年少女向け名作と「教養」形成

児童文学における翻訳叢書が果たした役割」と題した研究を行った。それにより、1950年代に刊行された、「世界」を「地域割り」にして叢書を構成するという新しい発想のなかで、「西洋」の文学が相当な優位を占めること、叢書を企画した側に強い「教養」形成への願望がしばしばみられるとともに受信者側の大人の媒介者にも同様の傾向がみられること、出版社・家庭・学校という子ども読者を取り巻く環境の構築に戦後の民主主義に向けた熱い思いが関与していることなどが判明してきていた。

このように、いくつかの主要な「叢書」における「地域割り」という構成からは、「西洋」重視の傾向が著しいものの、その一方で、たとえば創元社や岩波書店などの叢書においては、英語圏や他のヨーロッパ、ソ連(当時)と比べても特異と言いうような中国・韓国の作品選定がなされている。すなわち、「教養」形成を追求する上で、「西洋」と「東洋」に求めるものに差異があるのではないかとの推測が成り立つ。そこからは、戦後の日本社会が十代の「少年少女」読者に「叢書」形式の読書を通じて何を「教養」として獲得させようとしていたかが追究していけると考えた。

2. 研究の目的

直近の研究課題で扱った叢書類 創元社「世界少年少女文学全集」や講談社「少年

少女世界文学全集」、また岩波書店「岩波少年少女文学全集」をまずは基軸としながら、下限は1970年代刊行の小学館版の叢書等を新たに視野に入れることにして、すでに「西洋」関係について検討を開始している「地域割り」叢書の場合は「東洋」編等の内容について吟味を行い、両社がどのような読者意識のもとに編纂されていたかを対照的に把握するようにする。また新たに検討を開始する叢書については、収録作品の概要把握に努めた後、上記の検討に入っていく。必要に応じて個別の収録作品や翻訳者・再話者との系統を追究することも念頭に置く。

これらを通して、戦後日本の社会における海外文学が、人間形成に資する「教養」としてどのような期待を担わされていたのか、その歴史的な意味を考える契機とする。

3. 研究の方法

本研究を遂行するに当たっては、専門的な資料所蔵館における資料調査と資料収集、関連する資料購入と調査、研究途中で段階的な成果発表を3つの柱とした。第1の柱としては、大阪府立中央図書館国際児童文学館や国際子ども図書館などにおいて該当する叢書類を調査し、必要な資料収集を行う。第2の柱としては少年少女向け翻訳叢書とその周辺資料、研究をするうえで必要な児童文学研究・文学理論・批評関係図書などの資料、そして対象時期および現在の「教養」関係書や東アジア関係資料の収集を行い、上記の収集資料ともども内容把握に努める。第3の柱としては、比較文学、児童文学双方の分野における国内外の学会の場で、随時、研究発表の機会を得られるようにする。

研究途中からは、子ども読者に対する媒介者として大きな意味を持つ、学校図書館という場に注目し、関係する雑誌における翻訳や叢書関係の調査を行うことにも着手した。

4. 研究成果

口頭および論文として発表されたものを中心に、年度の順に従い、テーマが共通するものは適宜まとめつつ、以下に記していく。その上で、概括的な成果をまとめることにする。

第1に、1950年代に創元社と講談社から刊行された2つの「地域割り」叢書について、これまで進めてきた「西洋」諸地域の翻訳作品の少年少女読者に対する提示のあり方を念頭に置いた上で、「東洋編」の諸巻の検討を行った。先行する叢書類の巻構成や最近の「東洋学」関係の論考を踏まえた上で、創元社版の「東洋編」が编者側のきわめて意欲的な構想のもとに成立していること、半面、「西洋」における当時の学術成果のもとに一元的な文化程度の判断基準が存すること、「中国」の比重が広汎に高まることを指摘し、また講談社版では、創元社版と差異化が図られつつも、収録作品等で共通性が見られるこ

と、創元社版と共通する編者側の意識があることなどを確認した。両者の検討を通して、当時の児童文学関係者たちにとって、「日本」が「西洋」を経由したまなざしの下に、「東洋」の内でもあり外でもあるという二重性を持って自己認識されていたことが露呈した。この結果を、20世紀を見渡すような広汎な視野に立って眺めてみると、20世紀後半の1950-70年代の日本の児童文学界では翻訳叢書が隆盛を極めたこと、それらの多くは「世界」全体を把握し少年少女読者の「教養」形成に資する意図があったこと、その際の海外作品の選択に「西洋」と「東洋」で差異があったこと、背景に明治以降の日本社会全体における西洋文化需要の問題が潜むことなども指摘できるだろう。

第2に、小学館「少年少女世界の名作文学」叢書を中心とした検討からは、以下の考察を得た。すなわち、同叢書は、先行する2つの「地域割り」叢書の形式を受け継ぐが、内容と外観の双方でかなり異なる。一般文学からの作品収録が多い反面、いわゆる「和文和訳」の方式の多用がもたらす弊害が生じていること、表紙を飾る泰西画群が形成する別種の「教養」が想定されていることなどが特徴である。またこうした形態の叢書の出現が、児童文学が産業として発展していく中で見られる点も注目される。

第3に、1950年代から70年代を概観してみた場合、とくに60年代から70年代にかけての時期に、「少年少女」読者は解体する一方で翻訳全集に対する期待も変化し、全員が共有しうる「読書の源泉」=「教養」という考え方が破綻する中で、画期的で新鮮なものたりえた「世界」を「地域割り」にした翻訳叢書が役割を終えたものとなった。

第4に、講談社「世界の名作図書館」を検討した結果、以下のような点が明らかになった。すなわち、1966年刊行開始の同叢書は、第二次大戦後の先行するいくつかの叢書に見られた「地域割り」の構成をとらず、新たな区分8つの「領域」を立てるという方式を採用した。同時に、収録作品はフィクションにとどまらず、電機やノンフィクションを相当数含むものとなった。収録作品の傾向や翻訳のされ方、企画島嶼との変更から推測される翻訳事情、監修者の選定やカラーワイド豪華本の造本根配本開始から半年ほど付された巻末「解説」と「読書指導の手引き」、刊行当初に作製された別冊子等にも目を向けるなかで、本叢書が高度経済成長の只中で、一般家庭の母親を強く媒介者として明確に意識したこと、当時の関連雑誌に掲載された論考との関連の中で、翻訳をめぐる議論が種々かわされたことを確認するとともに、「世界」及び「教養」の意識が、大きく変貌した様子を時代状況の中で捉えた。

第5に、上記関連雑誌として視野に入ってきた『学校図書館』誌上における児童文学ジャンルや、翻訳、叢書関係に言及した論考等

に焦点を当ててみた。とくに1965年から70年までの時期に絞り、月刊の各号を通覧する中での知見をまとめると、以下ようになる。すなわち、当該の時期において、強く「完訳主義」を主張し、絶対的な児童文学評価の基準を信奉する児童文学者がいる一方で、むしろ柔軟な「翻訳」に関する姿勢を見せる海外児童文学の専門家の存在も明らかになった。またねそもそもの議論の発端が学校教師という媒介者による必読図書選定にあったこと、文学全集隆盛の刊行状況があったこと、当時の刊行企画における海外受賞作乃至本邦初訳が必ずしも専門家からは評価されなかったことなども確認しえた。媒介者側の資料におけるこのような議論の経過自体、この時期における「教養」的な「叢書」意識の残存とみなせるだろう。

第6に、少し目を転じて、1980年代以降の日本の現実を描いた児童文学作品群の特徴を、翻訳作品群が参照軸たりえたかを念頭に置いて考察してみた。その結果、1970年代末のいわゆる「タブーの崩壊」以降も、欧米圏の作品と対比しうる傾向が見られる一方、20世紀末頃から翻訳作品群が参照軸としての機能を失いつつあることが明らかとなった。

こうした研究を通してみると、1950年代と60年代以降での少年少女向け翻訳叢書における諸状況が大きく異なる点が明確となった。「世界」の捉え方の差異や「翻訳」のされ方そのものの問題がある一方、「読書」に対する「教養」としての期待は継続している。すなわち、この間、「西洋」の作品重視の傾向は一貫して変わることはない。もちろん、戦後の新しい作品群が翻訳されつつある中で、「叢書」収録作品がより「古典」に傾きがちとなるといった変化はみられるものの、「教養」の基本としての「西洋」重視は、少なくとも1970年代までは認められるものであった。他方、「東洋」については、国際情勢の変化、とくに中国の政治状況の変化に伴い、一時期の熱いまなざしは見られなくなる一方、上記のような「西洋」の作品重視という翻訳叢書の傾向に対して、意図的に東欧やアジア地域の作品を収録・紹介すべきであるという意見も批評家からは出てきてもいたのである。

そして、今後に向けた検討課題としては、「叢書」形態のその後として、1970年代以降の動向を概観していくこと、これまで等閑視してきた、従来からも取り上げてきた「叢書」群における「日本」の作品や「古典」作品に改めてまなざしを向けることで、それぞれの時期において「少年少女」が身に着けるべき「教養」の総体がいかなるものであったかを概括していくこと、またいわゆる「現代児童文学の出発期から転換期に至る中で」、「創作」と「翻訳」の相互作用を検討していく中で、「児童文学」ジャンルというものが、どのような「読者」に対する期待を担

わされてきたのか、その意味を改めて追及していくことなどが、明らかになってきたと言えるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

佐藤宗子「岐路に立つ翻訳児童文学叢書 1960年代後半の普及と波及

」、査読無、『千葉大学教育学部研究紀要』63巻、410-418ページ、2015年3月1日

佐藤宗子「「地域」から「領域」へ 一九六〇年代青少年向け翻訳叢書における「教養」の転換」、査読無、『千葉大学教育学部研究紀要』62巻、402-410ページ、2014年3月1日

佐藤宗子「分岐点にたつ「教養」的翻訳叢書 小学館「青少年世界の名作文学」の意味」、査読無、『千葉大学教育学部研究紀要』61巻、503-510ページ、2013年3月1日

佐藤宗子「参照に浮かぶ「東洋」 戦後の青少年向け翻訳叢書における位置と範囲」、査読無、『千葉大学教育学部研究紀要』60巻、491-500ページ、2012年3月1日

[学会発表](計 6件)

佐藤宗子「1980年代以降日本の児童文学が描く現実 翻訳作品を参照軸として」、第12回アジア児童文学大会、昌原コンベンションセンター(昌原市、韓国)、2014年8月9日(土)

SATO, Motoko, The Unbalanced Representation of East and West: On Japanese Collections of Juvenile World Literature in the 20th Century, XXth Congress of ICLA(International Comparative Literature Association), Paris University(Malsherbes Campus)(パリ、フランス)、2013年7月22日(月)

佐藤宗子「青少年向け翻訳叢書における「世界」と「東洋」 1950年代刊行の2種が示唆するもの」、第11回アジア児童文学大会、国連大学ウ・タント国際会議場(東京)、2012年8月24日(金)

佐藤宗子「「世界」の受け止め方と受け入れ方 戦後の翻訳叢書と少女の「教養」形成」、日本イギリス児童文学学会西日本支部講演会、大学コンソーシアム大阪(大阪)、2012年7月21日(土)

佐藤宗子「参照に浮かぶ「東洋」 戦後の青少年向け翻訳叢書における位置と範囲」、日本児童文学学会第50回

全国大会、東京都市大学(東京)、2011年10月29日(土)

佐藤宗子「戦後の青少年向け翻訳叢書と「教養」形成 創元社・講談社・岩波書店を中心に」、日本比較文学会東京支部2011年5月例会、清泉女子大学(東京)、2011年5月21日(土)

[図書](計 2件)

『第12回昌原アジア児童文学大会 <子供の夢をはぐくむ文学> 日本語版』収録、佐藤宗子「1980年代以降日本の児童文学が描く現実 翻訳作品を参照軸として」、主催・アジア児童文学学会韓国本部、137-143ページ、2014年8月1日

川戸道昭・榊原貴教編著『世界文学総合目録』第10巻(東欧諸国・中国・インド/アラビアン・ナイト編)収録、佐藤宗子「青少年文学全集と教養形成 戦後の「翻訳」叢書が担う意味」、460-468ページ、大空社・ナグ出版センター、2012年12月9日

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 宗子(SATO, Motoko)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号: 40154108

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号:

(3)連携研究者
なし ()

研究者番号：